Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エリザベス・アイゼンシュタイン著 最初の職業的革命家,フィリッポ・ミケル・ブォナロッティ(1761-1837):伝記的評論
Sub Title	The first professional revolutionist : Filippo Michele Buonarotti 1761-1837 : a biographical essay, by E. L. Eisenstein
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.6 (1961. 6) ,p.501(65)- 505(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19610601-0065
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610601-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あるであろう。じながら、しかも資本主義の高度化に対する農業経済の自衛策でも。のではなかろうか。それは農業経済の資本主義化によって生れ長

衛体としては、社会経済のより一層の資本主義の高度化に、階級と 限界を課せられて存続すると考えられる。これが共済に対する筆者 をもった場合にまた農業にも発生してくる大資本ー えず一歩先きを歩み続ける農業以外の、またはそれらが農業と関連 消せられて、新時代の新原則による制度がこれに代って誕生するで して対抗する組織として、一応の発展をみながらも、結局は一定の の高度化の当然の結果としての大資本、独占資本 うか。<br />
資本主義的な<br />
原理や技術を採り入れながら、<br />
しかも資本主義 農業経済における一種独特なる制度として在り続けるのではなかろ 主義に転ずる時があったとしたならば、このような共済はやはり解 的な要素を多分に吸収しながら、他面においては絶えず資本主義的 あろう。共済は資本主義化も社会主義化 もし ない。共済は当面は な傾向、要素に対抗せんとしていくであろう。もし資本主義が社会 することによって社会化されたものになるとも考えられない。しか 成すとは考えられない。またいまの共済が、資本主義が社会主義化 もまた考えられないところである。共済は一面においては資本主義 して資本主義のより一層の前進につれて、共済が資本主義化すると かく考えてくると、共済が資本主義を社会化する積極的な作用を 中小規模の生産資本体である農家経済に対する圧迫への自 ーの形成とその 農業よりも絶

の見解であり、本書の共済論に対する筆者の主張である。

り詳細な研究が、本書に続いてなされることを期待する。といる。これらの諸点は共済をめぐる大問題点であって、さらによけの体質改善が論じられている。このあたりは、まさに実学の面目協の体質改善が論じられている。このあたりは、まさに実学の面目協の体質改善が論じられている。このあたりは、まさに実学の面目とが指摘せられて、農協共済事業の現状と問題点に関する本書の記述は見るべきとこ

本書の実務篇は、組合関係者にとっては有益なる部分である。した。末尾の農協共済用語解説は便利である。これをようするに本書う。末尾の農協共済用語解説は便利である。これをようするに本書ら、末尾の農協共済用語解説は便利である。これをようするに本書は、その理論篇では、共済に関する、その本質、歴史、使命、特質は、その理論篇では、共済に関する、その本質、歴史、使命、特質は、その理論篇では、共済に関する、その本質、歴史、使命、特質は、その理論篇では、共済に関する、その本質、歴史、使命、特質なり高い共済の研究に努むべきところのものである。(目次三頁、本書の実務篇は、組合関係者にとっては有益なる部分である。し本書の実務篇は、組合関係者にとっては有益なる部分である。し本書の実務篇は、組合関係者にとっては有益なる部分である。し本書の実務篇は、組合関係者にとっては有益なる部分である。した。

# エリザベス・アイゼンシュタイン著

ミケル・ブォナロッティ『最初の職業的革命家、フィリッポ・

(Elizabeth L. Eisenstein; The First P.

(Elizabeth L. Eisenstein; The First Professional Revolutionist: Filippo Michele Buonsrotti 1761~1837, A Biographical Essay, 1959, pp. 205.)

## 野地洋行

り、力の入った研究書としてわれわれの興味をひく。サロッティに関する研究も、ハーヴァード歴史研究叢書の一冊であ思想史に関する研究がかなり数多く出るようになったが、このブォ最近アメリカから、ヨーロッパ大陸の労働運動史、あるいは社会

会主義の祖であるサン・シモンを同時に全体主義の祖として規定すら、たい、それらの研究の上にも現代の世界の現実的対立が多少なりりつつあるように思われる。しかもこれらの研究において目につくとは、それらの研究の上にも現代の世界の現実的対立が多少なりとは、それらの研究の上にも現代の世界の現実的対立が多少なりよい、むしろ旧ヨーロッパからソヴィエトおよびアメリカへと拡があった。大陸の労働運動史、社会思想史研究のが現われることを考えると、大陸の労働運動史、社会思想史研究のが現われることを考えると、大陸の労働運動史、社会思想史研究のが現かれることを考えると、大陸の労働運動史、社会思想史研究のが現かれることを考える。

The Cult of Authority, 1958)

の中でみていることは、著者の十分な歴史感覚を証明するものであが、ブォナロッティ研究をれ自体の盛衰や評価の変転を時代的背景らできるだけ自由であるよう努力しているのが買える。また、著者らできるだけ自由であるよう努力しているのが買える。また、著者らできるだけ自由であるよう努力しているのが買える。また、著者

ドに関連してか、あるいは、バブーフやダルテとの関係を通じてで うに、もし人が彼の名を知るのは十八世紀の革命の最後のエピソ**ー** る。この点を除けば、この研究は上述の三つの意図を十分果してい 想と行動に対する、著者自身の研究であり、著者の見解の論証であ けており、また本書の目標でもなかったものはブォナロッティの思 序文でもいっているように、イタリアでの最近の伝記的研究の成果 あるとすれば、著者がブォナロッティをブォナロッティとして、 るといっていいだろう。何よりも重要なことは、著者が指摘するよ の訂正。このようにみてくるとすでに気がつくように、この書に欠 新しい研究の紹介、第二に従来の研究の整理、第三に今までの評価 つまり、この研究は三つの意図をもっているようにみえる。第一に をとり入れつつ、その過小評価を 究に何か独創的な、新しい要因をつけ加えるということではなく、 本書の根本的な性格は、資料的探究によって、ブォナロッティ研 訂正し、適正な歴史的地位を与えようとするものである。 ーそして本文ではその過大評価

きつけた上でその異同が具体的に、あるいは、資料的に考証された 上でなければ、簡単に納得されうる問題ではないと思われる。 者も異議はないが、バブー に対するブォナロッティの個性を高く評価することにはもちろん評 ナロッティを重くみるという見方には十分な理由があり、バブーフ それが具体的に資料にもとづいて論証されていないのである。バブ 一七九三年の憲法の終生変らぬ擁護者としてみているのであるが、 思想とブォナロッティの思想の具体的交流をも省略してしまったこ バブヴィスト、共産主義者としてよりも、ロベスピエール主義者、 研究されたものとして省略し (p. 26) たばかりでなく、バブーフの とは残念に思われる。より具体的にいえば著者はブォナロッティを、 れだけにまた、著者がパブーフの平等者陰謀に関する叙述を、十分 面を再評価した点であるということができるのではあるまいか。そ まり単なるバブーフの宣伝者でない局面、独自の革命家としての局 フ主義者としてのブォナロッティよりもジャコバンとしてのブォ フの思想とブォナロッティの思想とをつ

問題は更に複雑となるであろう。
の両方の大義に対して終生忠実であったブォナロッティにあってはるのだが、(マティエは バブーフをロベスピエールの延長の上に見、ルフェーブルはそれらを全然別の社会的基盤の上に立つ二つのものの一方の大義に対して終生忠実であったブォナロッティにあってはの一方の大義に対して終生忠実であったブォナロッティにあってはの一方の大義に対して終生忠実であったブォナロッティにあったが、ハフェーブルの論争点でもあったスピエールとバブーフの対比はそれ自体、解決されるべき革ロベスピエールとバブーフの対比はそれ自体、解決されるべき革ロベスピエールとバブーフの対比はそれ自体、解決されるべき革

著者はこの研究に一貫して、ブォナロッティを二重生活者として 提えた。すなわち、一方において熱烈なジャコバン主義の擁護者、 ロベスピエールの使徒、左翼共和主義者としての生活。だがその本質は がコフ的な秘密結社と職業的革命家としての生活。だがその本質は がコーフ的な秘密結社と職業的革命家としての生活。だがその本質は めの手段としてのみ意義を認められるのだ。「彼の社会を実現するための手段としてのみ意義を認められるのだ。「彼の社会を実現するための手段としてのみ意義を認められるのだ。「彼の社会を実現するための手段としてのみ意義を認められるのだ。「彼の社会を実現するための手段としてのみ意義を認められるのだ。「彼の社会を実現するための手段としてのみ意義を認められるのだ。「彼の社会を実現するとして 原理にもとづいているのだ」(p. 78)

を馬の前にとりつけるようなものである。」(p. 131) 『階級なき社会』が絶対不可欠であった。」「有徳の共和国よりも』財で級なき社会』が絶対不可欠であった。」「有徳の共和国よりも』財の最後の目標は有徳の市民の共和国であった。その目標のためには

となる。 となる。 となる。

著者はかなりの自信をもって、くり返えしブォナロッティの本質

していた。」(p. 26) ・バブーフ主義者』とは考えなかったようだ。 むしろ、 彼はつねに ・バブーフとの密接な同盟にもかかわらず、 ブォナロッティは自分を バブーフとの密接な同盟にもかかわらず、 ブォナロッティは自分を がブーフ主義にみる 見解を 否定していることを つけ 加えておこ

「事件と彼の著書との間の時間のへだたりにもかかわらず、『平等のための陰謀』は、革命的エピソードの歴史的評価と考えられてはのための陰謀』は、革命的エピソードの歴史的評価と考えられてはとの人間にとっても、なくてならないよりどころとして役立ったために、ヴァンドーム裁判(バブーフ事件に関する裁判……書評者)ではなくてテルミドール九日(ロベスピエールの没落……書評者)ではなくてテルミドール九日(ロベスピエールの没落……書評者)ではなくてテルミドール九日(ロベスピエールの没落……書評者)ではなくてテルミドール九日(ロベスピエールの没落……書評者)ではなくてテルミドール九日(ロベスピエールの没落……書評者)とそ、この著作の心理的、劇的クライマックスなのだという事実をとそ、この著作の心理的、劇的クライマックスなのだという事実を見過す傾向がある。」(p. 69)

珍しいことではない。義、またはジャコバン主義にみることには理由があるし、それほど我、またはジャコバン主義にみることには理由があるし、それほどすでにのべたように、ブォナロッティの本質をロベスピエール主

(豊田堯「バブーフとその時代、四〇七頁)。 注 たとえば「ブォナロッティのようなロベスピエール主義者」

またガロディも「それ(ブォナロッティの教義)はまた、

tifique, 1949, 平田清明訳、二四三頁) と関って平等を 実現させる》 という倫理的課題 にすりかえよら」とした、とのべてはいるが、本質的には、これらの欠点にら」とした、とのべてはいるが、本質的には、これらの欠点にはがいる。(R. Garaudy; Les sources françaises du socialisme scientifique, 1949, 平田清明訳、二四三頁)

したがって、今後われわれの課題となるのは、ブォナロッティがとの点までバブーフ主義者であり、またどの点においてバブヴィズムからずれるか、その具体的 \*論証\* ではなかろうか。この著にはそれが欠ける。著者はブォナロッティのジャコバンとしての性格を強く主張する余り、バブーフとの交渉を軽視した傾きがある、といられたこととして省略した。その点はうなずけるが、それと同時にバブーフとブォナロッティとの、思想的交流をも、ともに省略したのはうなずけない。著者にとって、バブーフ主義者としての性格を放密結社活動の部面としてしか考えられていないようである。著者秘密結社活動の部面としてしか考えられていないようである。著者秘密結社活動の部面としてしか考えられていないようである。著者を次のようにいう時、それは極言ともいえよう。「ブォナロッティの\*平等のための陰謀\*に関する叙述が、誠実な記録者の叙述か、あるいは、無意識的な(あるいは計画的でさえある)伝説作家の叙述か、みきわめることはむづかしい。」(p. 44)

ブォナロッティの秘密結社は、バブーフの時代のそれが一揆的

終起主義だったのに対し、より浸透主義的であり、宗教的神秘主義 りであったことは認められているが、このブォナロッティの秘密結 さとにはならない。つまり彼の二重生活の影の部分を低く評価する ことは、とりもなおさず、彼の陽向の部分を高く評価することは、とりもなおさず、彼の陽向の部分を高く評価することない。 で、実際、ブォナロッティが、一八三〇年代の共和主義運動・労働 だ。実際、ブォナロッティが、一八三〇年代の共和主義運動・労働 だ。実際、ブォナロッティが、一八三〇年代の共和主義運動・労働 だ。実際、ブォナロッティが、一八三〇年代の共和主義運動・労働 た。実際、ブォナロッティが、一八三〇年代の共和主義運動・労働 をといてブォナロッティが、一八三〇年代の共和主義運動・労働 とも密接な仲間たちだったのである。(pp. 98—101)

だが、彼が決定的な役割を果した、というのは、彼が、十八世紀のシャコバン的伝統を、十九世紀の経済的条件の中から生まれた諸のジャコバン的伝統を、十九世紀の経済的条件の中から生まれた諸意味なのである。だから、ジャコバンに余り好意をもたないサン・意味なのである。だから、ジャコバンに余り好意をもたないサン・分意いである。だから、ジャコバンに余り好意をもたないサン・分意のであるのはブォナロッティの影響なのだ、著者はそう述べて好意的であるのはブォナロッティの影響なのだ、著者はそう述べて好意的であるのはブォナロッティの影響なのだ、著者はそう述べて好意的であるのはブォナロッティの影響なのだ、著者はそう述べて好意的であるのはブォナロッティの影響なのだ、著者はそう述べて好意的であるのはブォナロッティの影響なのだ、著者はそう述べて好意的である。(p. 126)

であるが、著者は、最近のイタリヤにおける、Saitta や、Lehning,=炭焼党の組織に由来している、という考えが支配的であったよう秘密結社の組織については、従来、それがイタリヤのカリボネリ

Francovich, などの研究に依拠しつつ、これに否定的な態度をとっている。そして、彼が一八〇九年頃作った秘密結社 Sublimes の影響、を強くうけたものであることを主張し、フリー・メーソンや、カルボナリとは独立に発展したとのべている。(pp. 40-42)や、カルボナリとは独立に発展したとのべている。(pp. 40-42)をして一般に、ブォナロッティの秘密結社の自立性を強調する立場で立っているようである。

150 以下〉における歴史的評価はこれを裏付けるであろう。 かかっ の研究は、有名な共産党宣言の冒頭の一節、「一つの幽霊がヨーロッを意識してか、しばしば「メッテルニヒにとりついた幽霊」(p. 46)を意識してか、しばしば「メッテルニヒにとりついた幽霊」(p. 46)を意識してか、しばしば「メッテルニヒにとりついた幽霊」(p. 46)をで、すでに本書の著者が、ブォナロッティの本質をジャコバニストとしてみていることをくりかえしてのべておいたが、結論(p. 46)ストとしてみていることをくりかえしてのべておいたが、結論(p. 46)ストとしてみていることをくりかえしてのべておいたが、結論(p. 46)以下)における歴史的評価はこれを裏付けるであろう。

ている。著者は二人のブォナロッティ研究家を評しつつ、次のようにいっ

たサークルとの交流を調べている。だがこの二つの結びつきにおけスが屢々出席していたサークルと、ブォナロッティが顔を出してい媒介者としているが、Garrone はもっと精密に研究し、若きマルク媒介者 はブランキをもって ブォナロッティと マルクスとを結ぶ

であろう。

であろう。

であろう。

であろう。

であろう。

著者によると、ブォナロッティの研究が復活したのは、一般的には、レーニンの生が、とのような消極的な理由とともに、積極がというような理由があげられている。この点著者は Onnis の意見というような理由があげられている。この点著者は Onnis の意見というような理由があげられている。この点著者は Onnis の意見というような理由があげられている。この点著者は Onnis の意見を採用している。

にしたいためであったことを最後につけ加えておこう。 本お、本書はすでに飯田鼎氏によるすぐれた紹介があるが〈本誌五十二巻十一号〉、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号〉、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに再びとり上げた理由は、バブーフと共産五十二巻十一号)、ここに対していたのであったことを最後につけ加えておこう。

#### Z・G・ビルビヤ共著 E・ソロモン

# 『大都市シカゴの経済分析』

Metropolitan Chicago, An Economic Analysis, by Ezra Solomon and Zarko G. Bilbija, The Free Press of Glencoe, Illinois 1959 (p. 208).

## 高橋潤二郎

(-

チの重要性が次第に認識される様になり、この様な要請に応えるべ域経済に関する研究、経済活動に対する所謂リジオナル・アプロー最近、我国で地域経済政策の確立が各方面の関心を集めだし、地